

美のある暮らしへの渴望を呼ぶ

川端康雄編訳 月曜社 3080円

小さな芸術 社会・芸術論集 I

ウィリアム・モリス〈著〉

「小さな芸術」とはなにか。歴史に名を残す絵画や彫刻、建築に対し、名もなき職人芸、生活の美、つまりは民衆芸術のことを指す。だが、なぜ「小さな」が強調されるのだろうか。産業革命以降の生活と美意識の激変が、両者の関係を無残に破壊したからだ。民衆が日々の暮らしと労働とを美しく生きられることなく、芸術は成り立たない。盛況に見えるなら、芸術がたんなる贅品にすり替わり、金持ちの慰撫に成り下がったからだ。真の意味での芸術の復興のためには、この「小さな」の復興が絶対に欠かせない。

強い信念に支えられたモリスの口調は、たいへん理想主義的だ。が、裏腹に随所で攻撃的な性質をはらむ。具体的には「そうした贅品のせいでわれわれの家はがらくたで一杯になって芸術は息もつもらんばかりになり」「新しい建設の始まりが明らかになるまでは、せめて偽の芸術の破壊

に専念」といった箇所に見て取れる。使命の実現が困難なら当然かもしれない。頭が痛いのは、この文章を書いている机の周囲を見渡しただけで、「贅品」「がらくた」「偽の芸術」で溢れかえり、まさに息もつもらんばかりになっているからだ。誰もが「機械的労苦の大洪水」のなかで「心身両面のあらゆる奴隷制」の餌食になっているなら、なおさらだ。この点でモリスの言葉は古びていないどころか、いっそうの迫真を帯びる。が、このような状況で、かつてモリスが力説した理想へと向けて、たとえ一歩でも踏み出すことができるのだろうか。

それでも希望を持つのは、本書を読むと自分のなかに、モリスの言う暮らしを取り戻したい、という強い渴望が呼び覚まされるからだ。人が人らしく生きるところに美があるべきというなら、それはもはや理想などではない。実はささやかで、あたりまえのことなのだ。ゆえにモリスはそれを「小さな」と呼んだのかもしれない。



William Morris 1834
~96. 英国出身。アーツ
・アンド・クラフツ運動
を主導。織物や壁紙の
デザインで知られる。

評・榎木野衣

美術評論家・多摩美術大学教授